



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	目的語を標示する日本語の与格「に」と韓国語の対格「을/를」の有標性と学習困難度 : 韓国人日本語学習者のデータに着目して
Author(s)	村山, 友里枝
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 22, 57-74
Issue Date	2016-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61118
Type	departmental bulletin paper
File Information	057-074Murayama.pdf



目的語を標示する日本語の 与格「に」と韓国語の対格 「을/를」の有標性と学習困難度 — 韓国人日本語学習者のデータに着目して —

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士課程

村山 友里枝

Markedness and Learning Difficulty of the
Japanese Dative Case (*ni*) and the Korean
Accusative Case (*ul/lul*) Marking Objects:
With Special Reference to Data from
Korean Japanese-Learners

MURAYAMA Yurie

abstract

The purpose of this study is to apply the Markedness Differential Hypothesis (henceforth, MDH), proposed by Eckman (1977), to the analysis of the learning difficulty of dative and accusative cases in Japanese and Korean. The MDH claims that the areas of difficulty that a language learner has can be predicted in terms of the difference in typological markedness of these areas between the native language and the target language. This study argues that the notion of typological markedness should be replaced with the frequency-based notion of markedness in order to apply the MDH to the analysis of the learning difficulty of grammatical cases/postpositions. I use the data from Sejong Korean-Japanese Bilingual Corpora to determine the frequency-based markedness of Korean and Japanese dative and accusative cases and the data from KY corpus and C-JAS of Korean Japanese-learners to reveal their learning difficulties. Herein, the analysis of the data suggests that Korean Japanese-learners have difficulty in acquiring dative objects, as predicted by MDH.

1 はじめに

Haspelmath (2006: 25-27) によると、「有標性 (markedness)」の概念は、TrubetzkoyやJakobsonの1930年代の研究に始まり、ヨーロッパの構造主義、生成音韻論、機能一類型論的言語学、Chomskyの原理とパラメータの統語論、Griceの語用論、最適性理論、第一・第二言語習得、クレオール研究など、さまざまな研究領域で用いられてきた。

第二言語習得の分野では、有標性は、Lado (1957) に代表される対照分析仮説 (Contrastive Analysis Hypothesis、以下CAH) に代わって、目標言語の学習困難度を説明する原理として用いられるようになった。有標性の概念を用いた代表的な仮説にEckman (1977) の「有標性差異仮説 (Markedness Differential Hypothesis、以下MDH)」がある。MDHは、目標言語の学習の難しさは、母語と目標言語の比較 (すなわち、CAHの考え方) に加えて、類型論的有標性に基づいて予測できるという仮説である。その後、有標性を用いた学習困難度の研究は、Selinker (1972) によって提唱された「中間言語 (interlanguage)」の概念が第二言語習得研究に大きな影響力を与えるようになると、それに伴ってさらに発展した¹。

しかし、有標性の概念を用いた学習困難度の研究には、問題点が2つある。1つ目は、有標性を説明原理として用いている研究の領域に偏りがあるという問題である。MDHを支持する研究は、Eckman (2011: 620) によると、「ほぼ全てL2の音韻論」の領域であった。このような研究領域の偏りは、仮説の経験的妥当性や適用可能性を考える上で問題となる。

そして、2つ目は、類型論的有標性を用いている研究のほとんどが、目標言語として英語を対象にしているという問題である。Eckman (2011: 633) は、今後の研究の発展のため、英語以外の言語を目標言語として用いている研究の必要性を指摘している。本研究は、日本語と韓国語を対象とし、これまで有標性の観点から研究が行われてこなかった格の学習困難度について、頻度に基づく有標性を用いて分析するものである。とりわけ、本稿では、目的語を標示する与格と対格について分析を行う。本研究は、有標性を用いた学習困難度の研究領域を格の学習困難度の研究に拡張する試みとして位置づけられる。

村山 (2015) では、MDHを用いて日本語と韓国語の格の学習困難度を予測するにあたって、MDHの有標性の定義を見直す必要があることを論じた。村山 (2015) の主張は、Haspelmath (2006) に基づいて類型論的有標性の概念を再検討し、これに代わるものとしてCroft (2003) らが主張している頻度に基づく有標性の概念を用いることで、日本語と韓国語の格の領域でも学習困難度の分析が可能になるというものである。しかし、村山 (2015) では、データによる実証は試みておらず、予備的な考察にとどまっている。そこで、本稿では、日本語と韓国語の目的語を標示する与格と対格の有標性を、タグ

▶1 第二言語習得における学習困難度の研究の史的変遷については、村山 (2015: 56-61) を参照。

付きパラレルコーパスを用いて頻度概念に基づいて特徴付ける。その上で、韓国語日本語学習者コーパスのデータの分析を通して、MDHは日本語の格の学習困難度を正しく予測することを示す。

本稿の構成は、次の通りである。まず、第2節では、本研究の対象である韓国語と日本語における目的語を標示する格の特質について説明する。そして、第3節では、Eckman (1977) のMDHにおける有標性の概念がどのようなものであるか説明する。さらに、第4節では、MDHを格という領域に適用させるため、コーパスデータに基づく頻度によって格の有標性を特徴付け、MDHによる格の学習困難度の予測を提示する。第5節では、MDHによる格の学習困難度の予測を確かめるための予備的なデータとして、韓国語日本語学習者のコーパスを用いて、MDHの予測の考察を行う。最後に、第6節は、まとめと今後の研究の展望である。

2 直接目的語を標示する日本語の与格「に」の性質と韓国語との対応

本研究は、目的語を標示する格助詞を対象とするが、目的語の格標示について論じる前に日本語と韓国語の格助詞の対応関係について簡潔に説明する。日本語と韓国語の格助詞の対応関係は、ほぼ平行していると言われている（加藤・橋本・村杉（2004: 45-46）など）。次の（1）、（2）のように、日本語の「に」は、一般的に韓国語の「에/에게 [ey/eykey]」に対応する²。

- (1) a. 私たちの学校は新村にある。
b. 우리 학교는 신촌에 있다. (韓国語文法 語尾・助詞辞典 p.588)

- (2) a. 本を弟（妹）にあげた。
b. 책을 동생에게 주었다. (韓国語文法 語尾・助詞辞典 p.602)

しかし、(3a) に対応する韓国語の文 (3b) では与格は用いられず、対格「을/를 [ul/lul]」が用いられる³。

- (3) a. バスに乗る
b. 버스를/*에 타다

このような格助詞の違いは、第二言語習得における学習困難度の問題を引き起こす。本稿では、(3a) と (3b) のような日本語では与格で目的語を標示するが⁴、韓国語では対格で目的語を標示する二項動詞を分析の対象とし、韓国語日本語学習者の格の学習について、その学習困難度を有標性の観点から予測し、仮説を検証する。

まず、有標性の理論的な枠組みを論じる前に、(3a)、(3b) のような日本語と韓国語における目的語の格標示の対応関係を明確にしておく必要がある。

2.1 日本語の「に」の統語的なテストによる区別

Sadakane & Koizumi (1995) は、数量詞遊離、助詞を伴う分裂文、助詞を伴わない分裂文の3つのテストを31種類の「に」に対して行い、日本語の「に」

▶2 先行する名詞が無情物（場所・物）の場合は「에 [ey]」を用い、有情物（人・動物）の場合は「에게 [eykey]」を用いる。韓国語のローマ字表記については、イェール式を用いる（Sohn, 1999: 2-4）。

▶3 韓国語の対格には、「을/를 [ul/lul]」の2つの形態があるが、「을 [ul]」は子音の後に用いられ、「를 [lul]」は母音の後に用いられるという違いであり、両者の間に意味的な違いはない。「타다」が「에」を取る場合もあるが、永原（2004: 55）によると、これは「대통령 옆자리에 탔다. (大統領の横に乗った)」など場所を示す場合である（これを永原（2004: 55）は「着点 (Goal)」と述べている）。本稿では、2項動詞の目的語を対象とするため、「타다」が場所を取る場合は対象としない。

は、4つのタイプ（与格の格標識、後置詞、に挿入の「に」、コピュラの「に」）に区別されることを示した。そのうち、直接目的語を標示する「に」は、与格の格標識あるいは後置詞の「に」である⁴。Sadakane & Koizumi (1995) の統語的なテストを用いると、(3a) のような韓国語の対格「을/를 [ul/lul]」に対応する「に」は、与格の格標識か後置詞かを区別することができる。

表1は、Sadakane & Koizumi (1995) が行った3つの統語的なテストが与格の格標識「に」と後置詞「に」をどのように区別するかを示したものである。

■表1 Sadakane & Koizumi (1995) p.11による格標識と後置詞の区別

	数量詞遊離	助詞を伴う分裂文	助詞を伴わない分裂文
格標識	OK	*/??	OK
後置詞	*	OK	*/?/OK

まず、数量詞遊離のテストは、遊離数量詞と数量詞のホストとなっている名詞句 (Noun Phrase, 以下NP) は互いにc統御 (c-command) しあわなければならない (Miyagawa, 1989) という規則性に基づくものである⁵。格標識を伴うNPはこの条件を満たしており、(4) のように数量詞と結びつきうるが、後置詞を伴うNPは、後置詞を主要部とする後置詞句 (Postpositional Phrase, 以下PP) の中にあるため、それができない。「PPの節点は、NPが数量詞をC統御するのを妨げるからである」とSadakane & Koizumi (1995: 8) は述べている。したがって、このテストは、数量詞が「に」で標示されたNPと結びつくなら、それは格標識である可能性が高いことを示している。以下の(4)、(5)は、Sadakane & Koizumi (1995: 8) が挙げた格標識と後置詞の例である。

(4) 格標識

- a. [NP学生が] 3人 ピザを食べた
- b. ジョンが [NPピザを] 2切れ 食べた

(5) 後置詞

- a. * ジョンが [PP [NP学生] から] 3人 プレゼントをもらった
- b. * メアリーが [PP [NPコンピュータ] で] 2台 論文を書いた

次に、分裂文を用いた2つのテストは、「PPは分裂文の構造の焦点の位置に現れることがあるが、格標識のついたNPは現れない」という規則性に基づくものである。このテストは、「に」で標示されたNPが分裂文にできるなら、それは後置詞であることを示している。以下の(6)、(7)は、Sadakane & Koizumi (1995: 9) が挙げた格標識と後置詞の例である。

(6) 格標識

- a. * 昨日ピザを食べたのは、[NPメアリーが] だ
- b. ?? 昨日メアリーが食べたのは、[NPピザを] だ

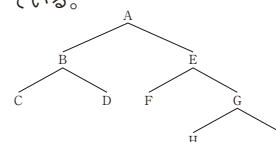
(7) 後置詞

- a. ジョンが手紙をもらったのは、[PPメアリーから] だ
- b. ジョンがケーキを切ったのは、[PPこのナイフで] だ

(3) の「～に乗る」について、Sadakane & Koizumi (1995: 12) は、(8) の例文を用いて3つの統語的なテストを行っている。

►4 Sadakane & Koizumi (1995: 16) によると、に挿入の「に」は、「カントはエミに舞台の上で踊らせた」のような自動詞と共起した使役化の行為者を表す「に」や、「エミにその難しい問題が解ける」のような間接主語がこのカテゴリーに属する。また、Sadakane & Koizumi (1995: 17) は、コピュラの「に」は、「部屋をきれいに片付けた」のようなある種の「述部」と結びつき、コピュラの構造に関連していると思われる述べている。これらを踏まえると、本研究が対象としている二項動詞の目的語の「に」は、に挿入の「に」とコピュラの「に」のどちらでもないことがわかる。

►5 ラドフォード (2006: 83-84) は、以下のような樹形図を示し、C統御について説明している。まず、C統御を「構成素Xはその姉妹である構成素YとYに包含されるあらゆる構成素ZをC統御する」と定義している。具体的には、例えば、下の樹形図のBは、Eという姉妹を持ち、EはF, G, H, Jを包含しているので、BはE, F, G, H, JをC統御すると説明している。



- ▶6 Sadakane & Koizumi (1995) は、このような「に」が格標識と後置詞の両方の特性を持っているという分析を示しているのではない。格標識か後置詞のどちらかである。
- ▶7 格標識の「に」と後置詞の「に」が出現する文法的な環境について、Sadakane & Koizumi (1995: 18-20) は、「affectedness (被動性、影響性)」を挙げている。そして、「格標識の「に」が付いたNPの指示対象は、動詞(述部/文)によって示された行為においてより影響を受けやすく、後置詞の「に」の付いたNPの指示対象は、あまり影響を受けない」と述べている。Sadakane & Koizumi (1995: 19-20) によると、曖昧な場合、影響を受けた解釈も影響を受けない解釈も可能であり、格標識の場合、ミカがカンタに会ったことによって心理的に影響を受けるという解釈、後置詞の場合は、影響を受けないという解釈になる。
- ▶8 加藤他(2004: 45) は、「예/에게 [ey/eykey]」は、主格や対格とは異なり、格脱落が難しいこと、様々な意味の用法を持つことから、「예/에게 [ey/eykey]」は、後置詞(もしくは内在格)であると述べている。

- (8) a. カンタは遊園地で馬に3頭乗った
b. ?? カンタが遊園地で乗ったのは馬にだ
c. カンタが遊園地で乗ったのは馬だ

(3) の「～に乗る」の「に」は、(8) で示されたように数量詞遊離が可能で、助詞を伴う分裂文はぎこちなく、助詞を伴わない分裂文は完全に自然な文として認識される。よって、この「に」は与格の格標識であると主張している。

さらに、「～に会う」について、Sadakane & Koizumi (1995: 15) は、(9) の例を挙げ、3つのテスト全てにパスするため、格標識と後置詞の区別が曖昧であると述べている⁶。

- (9) a. カンタは成田空港で知り合いに3人会った。
b. カンタが成田空港で会ったのはミカにだ。
c. カンタが成田空港で会ったのはミカだ。

「会う」の「に」が格標識である場合 (9a, 9c) と、後置詞の場合 (9b, 9c) があり、格標識と後置詞とでは意味が異なる⁷。本稿では、(9a) の数量詞遊離が可能なることから、「～に会う」の「に」が格標識である場合を対象として分析する。2.2節では、ここで述べた統語的なテストを用いて日本語の「に」と韓国語との対応関係を明らかにする。

2.2 韓国語との対応関係

加藤・橋本・村杉 (2004) は、Sadakane & Koizumi (1995) に基づいて、日本語と韓国語の目的語を標示する格の対応関係を述べている。加藤・橋本・村杉 (2004) は、韓国語で対格「을/를 [ul/lul]」に対応する (3) のような動詞の目的語を標示する「に」は、格標識と分析されることを指摘している。また、日本語の後置詞の「に」は、韓国語の後置詞「예/에게 [ey/eykey]」に対応すると主張している⁸。しかし、加藤・橋本・村杉 (2004) の分析は、限られた動詞のみを対象としており、対応関係が十分に明らかになっていない。2.1節で述べたように、直接目的語を標示する「に」は、与格の格標識あるいは後置詞の「に」の可能性がある。論理的には、韓国語で対格「을/를 [ul/lul]」に対応する (3) のような動詞の目的語を標示する「に」が後置詞の「に」である可能性もあるが、加藤・橋本・村杉 (2004) では、その可能性について論じてはいない。ここでは、格標識の「に」だけではなく、後置詞の「に」が対格「을/를 [ul/lul]」に対応する動詞があることをSadakane & Koizumi (1995) のテストによって示す。

「似る」や「同情する」の目的語を標示する格は、韓国語では対格「을/를 [ul/lul]」であるが、Sadakane & Koizumi (1995) の統語的なテストを用いると、(10)、(11) が示しているように「に」はどちらも後置詞の性質を示す。

- (10) a. * 子どもは親戚に2人似ている
b. 子どもが似ているのは親戚にだ
c. ? 子どもが似ているのは親戚だ
- (11) a. * 友達に3人同情した
b. 同情したのは友達にだ
c. * 同情したのは友達だ

つまり、日本語の「に」と韓国語の目的語を標示する格標識/後置詞の対応関係は、次の3通りになると考えられる⁹。

- (12) a. 与格の格標識「に」と「을/를 [ul/lul]」が対応する場合
(「乗る」・「会う」等)
- b. 後置詞「に」と「을/를 [ul/lul]」が対応する場合
(「似る」・「同情する」等)
- c. 後置詞「に」と「에/에게 [ey/eykey]」が対応する場合
(「ほれる」・「ぶつかる」等)

以下では、(12) に示したような日本語と韓国語の目的語を標示する格標識/後置詞の対応関係の特徴づけに基づいて学習困難度の分析を行う。次節では、まず、本研究が理論的枠組みとして用いる有標性の概念とそれに基づいた学習困難度の仮説を概観する。

3 有標性差異仮説(MDH)における有標性

本節では、Eckman (1977) のMDHを取り上げ、MDHの類型論的有標性の概念がどのようなものであるか論じる¹⁰。Eckman (1977: 320) は、CAHの予測への批判をふまえて、「第二言語の学習において難しい領域を予測するために母語と目標言語を比較することは有効」だが、それだけでは十分ではなく、母語と目標言語の違いに加えて、「相対的な困難度 (relative degree of difficulty)」を組み入れる必要があると主張した。そのために、Eckman (1977: 320) は、まず、有標性を (13) のように類型論的に定義した。

- (13) ある言語における現象Aの存在がBの存在を含意するが、Bの存在がAの存在を含意しないなら、現象AはBよりもより有標である。

(13) の類型論的有標性が示しているのは、次のようなことである。類型論的知見から、現象AとBの両方を持つ言語のタイプと、Bのみを持つ言語のタイプがあり、Aを持つ言語は必ずBも持つが、逆は必ずしも言えないという関係の場合に、AはBよりもより有標であると特徴づけられる。そして、このような類型論的な有標性の概念に基づいて、学習困難度を規定し、Eckman (1977: 321) は、(14) の「有標性差異仮説」を提案した。

- (14) 有標性差異仮説 (Markedness Differential Hypothesis, MDH)

言語の学習者が直面する困難な領域は、母語と目標言語の文法の体系的な比較と普遍的な文法の中で述べられている有標性の関係に基づき、次のように予測される。

- (a) 母語と異なっており、母語よりも有標な目標言語の領域は難しい。
- (b) 母語より有標な目標言語の領域の相対的な難しさの度合いは、相対的な有標性の度合いと対応する。
- (c) 母語と異なっているが母語よりも有標ではない目標言語の領域は難しくない。

▶9 (12) のうち、(c) は、日本語と韓国語の後置詞同士が対応する場合なので、本稿の考察の範囲外である。

▶10 MDHのその後の発展として、Eckman (1991) の「構造的な一致の仮説 (Structural Conformity Hypothesis, SCH)」があるが、ここでは、説明の便宜のため、MDHを取り上げた。SCHは、中間言語の概念を取り入れ、MDHを改訂したものであるが、母語と目標言語の間に違いがない場合にもL2のパターン (中間言語) は有標性の原理に従うという仮説である。

Eckman (1977) は、英語・ドイツ語の障害音の学習困難度と、ペルシア語・アラビア語・中国語・日本語・英語の関係節の学習困難度についてMDHで正しく予測できることを論じている。ここでは、Eckman (1977) における障害音の学習困難度の説明を取り上げる。

Eckman (1977) は、英語とドイツ語の障害音の学習困難度について、英語母語話者のドイツ語学習者とドイツ語母語話者の英語学習者では、その学習困難度に違いがあるというMoulton (1962: 49-50) の研究に言及し、これはCAHでは説明できない現象であると述べている。英語では、語頭、語中、語末で有声と無声の障害音が生じるが、ドイツ語では、有声と無声の障害音は語頭と語中のみに生じる。ドイツ語母語話者にとって英語の語末で有声の障害音を発音するのは非常に難しく、英語話者にとってはドイツ語の語末で有声と無声の交替をするということを学ぶのは難しくないとMoulton (1962: 49-50) の指摘は、母語と目標言語の違いがL2の学習を困難にするというCAHでは説明がつかない。Eckmanは、この現象について、観察された(15)の言語類型により、次のような説明を試みている。

(15) 言語類型と有声と無声の対立

語頭・語中・語末の位置で有声と無声の対立を維持する言語
(英語、アラビア語など)

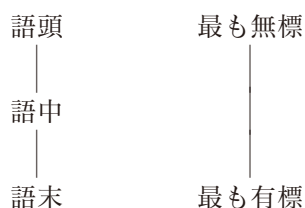
語頭・語中の位置で有声と無声の対立を維持する言語
(ドイツ語、ポーランド語など)

語頭の位置で有声と無声の対立を維持する言語
(コルシカ方言、サルディニア語)

語頭・語中・語末の位置で有声と無声の対立を維持しない言語
(韓国語)

このような言語類型により、Eckman (1977: 322) は、(13) で示した類型論的有標性の定義により、(16) のような有声と無声の対立の階層 (Voice Contrast Hierarchy) を提示した。

(16) Voice Contrast Hierarchy



この階層は、語中で有声と無声の対立を維持する言語は、語頭でも有声と無声の対立を維持するが、語末では必ずしもそのような対立を維持しないことを示している。語末の声の対立は、(16) の階層で示されているように語中・語頭の対立よりもより有標である。このような類型論的有標性に基づいて、MDHは、有標の対立を学習するドイツ語母語話者の英語学習者の学習困難度が高いということを予測する。これは、Moulton (1962: 49-50) の指摘した学習困難度の方向性を正しく予測するものであると論じている。このEckmanの議論は、母語と目標言語の違いのみでは説明できなかった現象も、類型論的有標性を用いることで、学習が困難な領域と学習困難度の方向

性を示すことができるようになることを示している。次節では、類型論的有標性と格の学習困難度について論じる。

4 頻度に基づく有標性

類型論的有標性を含む有標性の概念への批判が³、近年Haspelmath (2006)によってなされている。Haspelmath (2006: 27) は、有標性が様々な研究領域で用いられたために多義で曖昧になっていることを指摘している。第二言語習得では、有標性を用いた研究領域が偏っており、それは、Ellis (2008: 387) やCallies (2013: 406-407) が指摘しているように、有標性の概念の曖昧性がその理由となっていると考えられる。つまり、多様な意味と定義を持つ有標性の概念を見直す必要がある。

村山 (2015) は、格という領域にMDHを適用させるために、類型論的有標性の代わりに頻度によって有標性を特徴づけるというCroft (2003) らの定義を支持するという方向性を示した。Croft (2003: 110) による頻度の定義は、次のようなものである。

- (17) テキスト (トークン) の頻度: もし、あるカテゴリーの類型論的に有標な値のトークンが、あるテキストのサンプルで一定の頻度で生じるなら、無標の値のトークンは、そのテキストのサンプルで少なくとも同じ数だけ生じているだろう。

村山 (2015: 68) では、このCroftの定義を基に、「日本語の与格で目的語を標示する場合は、対格で標示する場合よりも相対的に頻度が低いということがわかれば、有標性が高いと特徴づけられる」と述べ、MDHを用いた格の学習困難度の予測の可能性を論じた。ここでは、具体的にどのように頻度を用いて格の有標性を特徴づけるのかについて論じる。

4.1 日本語と韓国語の目的語の格標示の頻度

管見の限り、日本語と韓国語の目的語の格標示に関する定量的な対照研究はなされていない。本稿では、頻度に基づく目的語の格標示の有標性を調べるにあたって、世宗韓日パラレルコーパス (세종 한일 병렬 말뭉치, Sejong Korean-Japanese Bilingual Corpora) を用いた¹¹。世宗韓日パラレルコーパスは、小規模のコーパスであるが、形態素解析がなされている日本語と韓国語の対訳コーパスである。

首藤・崔・原田 (2012: 441) は、「の」と「의 [ui]」について世宗韓日パラレルコーパスを用いて定量的な日韓対照研究を行っているが、パラレルコーパスを用いることによって、データの相違の影響 (すなわち、データのジャンルやトピック、内容等の他の要因) を最小限に抑えることが期待できると述べている。本研究でも、日本語と韓国語の目的語を標示する格の頻度について、他の要因を最小限に排除して比較するため、パラレルコーパスを用い

▶11 なお、世宗韓日パラレルコーパスの検索については、NARA System (ver. 2.0) を用いた。<<http://corpus.mireene.com/nara.php>> (2015年9月4日閲覧)

た。本稿では、二項動詞の目的語の格標示の頻度を調査するにあたって、夏目漱石『ころ』及び太宰治『斜陽』の日本語と韓国語の対訳データを対象として分析を行った。世宗韓日パラレルコーパスにおける『ころ』と『斜陽』の統計的情報は表2に示した。

■表2 世宗韓日パラレルコーパスにおける『ころ』と『斜陽』の統計的情報

ファイル	日本語		韓国語	
	夏目漱石 ころ 先生と私	太宰治 斜陽 三	夏目漱石 ころ 先生と私	太宰治 斜陽 三
文の数	1,697	341	1,692	360
形態素 (token)	31,765	8,185	37,891	8,806

本稿では、二項動詞の目的語を標示する格/後置詞の相対的な頻度を出すことを目的としているため、単にタグ付けされた「格助詞」を検索して頻度を出すというのでは不正確である。そのため、まず、「格助詞」のタグを利用して検索した後、一例ずつ共起する動詞を確認し、目的語を標示する用法以外のものを除外した。さらに、「与える」や「貸す」、「置く」などの三項動詞を除いた。二項動詞の目的語の格/後置詞として「を」と「に」が用いられているものに限ったところ、表3の結果が得られた。なお、「に」に関して、奥田（1983）の「に格と動詞の組み合わせ」の分類における「ありかのむすびつき」（すなわち、「存在動詞と組み合わせ、存在という状態が成立するために必要なありかを示すもの（奥田, 1983: 284）」）は、出現総数105あった。また、「墓参りに行く」のような「目的規定的な用法」は、出現総数16あったが、これらについては、ここで問題にしている目的語としての性質を完全に満たすものではないため、下の表の頻度には入れていない。表3の結果から、日本語の二項動詞の目的語の格/後置詞の出現頻度は、「を」が82.3%と圧倒的に多く、無標であり、「に」は17.7%と少なく、有標であると特徴付けられる。さらに、その対訳である韓国語のデータを調査した。結果は次の表4の通りである。

■表3 日本語の二項動詞の目的語の格/後置詞の「を」と「に」の頻度¹²

を	に
957 (82.3%)	206 (17.7%)

■表4 韓国語の二項動詞の目的語の格/後置詞

을/를 [ul/lul]	에 [ey]	에게 [eykey]
1078 (83.6%)	200 (15.5%)	11 (0.9%)

表3及び表4の結果により、目的語を対格で標示する韓国語の用法は、目的語を与格で標示する日本語の用法よりも無標であると特徴付けられる。

▶12 「を」の頻度については、「歩く」、「のぼる」のように自動詞であっても移動に関わる場所を表す対格を取る51例を含んでいる。

4.2 MDHに基づく格の学習困難度の予測

頻度に基づく有標性の関係に基づいて、MDHは、日本語の直接目的語を標示する格の学習困難度を次のように予測することができると考える。

(18) MDHに基づく学習困難度の予測

- (a) 与格の格標識「に」と対格「을/를 [ul/lul]」が対応する場合、より有標な「に」の学習は難しい
- (b) 後置詞「に」と対格「을/를 [ul/lul]」が対応する場合、より有標な「に」の学習は難しい

次節では、この予測に基づいて、学習者コーパスのデータを分析し、MDHの予測の予備的考察を行う。以下では、(a) に該当するものについて分析を行う¹³。なお、本稿では、学習困難度の判定基準として、誤用（誤用の数が多く、上級レベルの学習者でも誤用が見られること）、産出における初出時期（習得の遅さ）の2つを基準とする。

▶13 (b) については、コーパスから十分なデータが得られなかったため、本稿では扱わなかった。

5 韓国人日本語学習者のコーパスによるMDHの検証

本節では、4節の(18)で述べたMDHに基づく格の学習困難度の予測についての考察を行う。まず、韓国語母語話者は、「に乗る」のような日本語では与格で目的語を標示するが、韓国語では対格「을/를 (ul/lul)」で目的語を標示するものについて、習得が難しいかどうかを明らかにするため、対格の誤用を調査した。次に、目的語の格の習得について、5.1節で述べる誤用の見られた動詞を対象として、縦断的なコーパスを用いて調査を行った。その結果について、順に述べる。

5.1 タグ付きKYコーパスにおける誤用

日本語学習者の発話コーパスであるタグ付きKYコーパスを用いて対格の誤用を調査した¹⁴。タグ付きKYコーパスは、元データとして、KYコーパスを利用している。KYコーパスのデータは、中国語母語話者、英語母語話者、韓国語母語話者それぞれ30人ずつで、OPI判定による学習者のレベルは、初級5名、中級10名、上級10名、超級5名ずつである。タグ付きKYコーパスにおける韓国語母語話者の「を」の誤用は、表5の通りである。

▶14 タグ付きKYコーパス<<http://jhlee.sakura.ne.jp/kyc/>> (2015年3月9日閲覧)

■表5 タグ付きKYコーパスにおける韓国語母語話者の「を」の誤用数と誤用例

「を」と間違えた助詞	誤用数	誤用例
が	9例	番組の名前をよくわかりませんけど
に	6例	自転車を乗りました

で	2例	この店が有名だから、この店を買ってあげた人がいるでしょう
の	2例	日本語を勉強だけすることに
も	1例	何を見なくてもテレビを付ける
φ	1例	同じ仕事をしなからせんですから
その他	3例	それをために何をしていますか

本研究の対象である日本語で与格で目的語を標示し、韓国語では対格で目的語を標示する誤用例は、次の通りである。

【中級】姉の主人を会いました

【中級】わたしも、ここに初めて、自転車を乗りました

【上級】前、〈ええ〉前のほうで、〈え〉バスを乗って、〈はい〉行くと、

【上級】私は新幹線をあー八時半東京発の、〈はい〉新幹線に乗りました

【上級】今までなんか会えなかった友達を会って一、色々話をしたいんです

韓国語母語話者の日本語学習者は、上級の学習者でも、「を乗る」、「を会う」という誤用をしていることがわかる。上級の学習者であっても「を乗る」、「を会う」という誤用があることは、習得が難しいことを示唆する。しかし、タグ付きKYコーパスでは、学習者がどのように与格目的語を習得しているのかということは見えてこない。そこで、縦断的な発話コーパスを用いて調査した。

5.2 C-JAS (Corpus of Japanese As a Second language) による調査

韓国語母語話者の日本語学習者が、韓国語では対格で目的語を標示するが、日本語では与格で目的語を標示するものについて、誤用も含めどのような過程を経て習得しているかを明らかにするため、国立国語研究所のプロジェクトによるC-JAS (Corpus of Japanese As a Second language) を用いて調査を行った¹⁵。C-JASは、日本で日本語を第二言語として学んでいる学習者の縦断的な発話コーパスであり、韓国語母語話者3名、中国語母語話者3名の約3年間の発話が収録されている。データは、学習開始から3～4ヶ月に1回の割合で収集されており、それぞれの時期ごとの正用と誤用を調べることが可能である。なお、本稿では、中国語母語話者のデータについては対象としていないため、以下では、韓国語母語話者のデータについてのみ論じる。タグ付きKYコーパスにおいて、上級の学習者であっても誤用が見られた「乗る」と「会う」の2つの動詞を対象として、格がどのように用いられているのか調査した。

5.2.1 「乗る」の格の使用状況

まず、「乗る」の格の習得について述べる。以下の表は、C-JASにおけるK1、K2、K3のそれぞれの韓国語母語話者が、「乗る」という動詞を発話している回数を示している。表6の1期～8期とは、データが収集された時期のことであり、それぞれの時期ごとに「乗る」が何度発話されたかを表したものである。なお、ここでは、目的語標示の格の習得について調査しているため、目的語が発話されていない場合（例えば、「一人ひとり乗って」など）は除き、目的語を発話しているものに限って表にまとめた。表の黄色のセルは、正用

▶ 15 C-JAS <<http://c-jas.jpn.org/main.py>> (2015年6月2日閲覧)

である「に 乗る」の形の発話が見られた時期であることを示している。黄色のセルの<>内は「に 乗る」の形の正用の数である。また、表の赤のセルは、誤用が見られた時期であることを示している。誤用の数は（ ）内に示した。セルに色が付いておらず、数が示されているセルは、誤用も見られないが、「に 乗る」という形の正用も見られないことを示す。

■表6 C-JASにおける韓国語母語話者の「乗る」の発話とその回数

時期 話者	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期
K1	0	0	0	0	0	0	0	4
K2	0	0	0	2 (1)	1	0	1 (1)	1
K3	0	0	0	0	0	0	0	3 <1>

「～に乗る」と正しく発話していたのは、K3の8期に「日本人達と一緒に車に乗って」という1例が見られたのみであり、習得が難しいことが示唆される。

誤用については、「を 乗る」の誤用は、K2の4期に、「6時48分の一、船に乗って、ここに着いたのがー」という1例のみであった。また、K2の7期には、「電車で乗ったら、すぐボーンと地下鉄で来れます」という「で」と混同している誤用が1例あった。

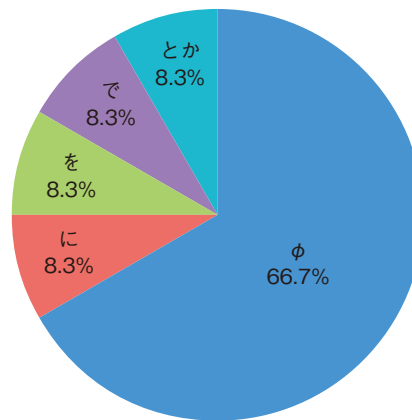
表7は、それぞれの学習者が「乗る」の目的語の格をどのように発話しているか時期ごとに整理したものである。また、図1は、「乗る」の格にどの格を使用しているかの割合を示したものである。

■表7 C-JASにおける韓国語母語話者の「乗る」の格の使用の内訳

話者	時期	発話数	内訳	発話例
K1	8期	4例	φ 乗る:4例	ばーす(φ)乗るとき
K2	4期	2例	φ 乗る:1例 を 乗る:1例	山手線(φ)乗って 船に乗って ※誤用
	5期	1例	φ 乗る:1例	車(φ)乗るって、1人1人乗るんでしょ?
	7期	1例	で 乗る:1例	電車で乗ったら... ※誤用
	8期	1例	とか 乗る:1例	山の手線とか乗って...
K3	8期	3例	φ 乗る:2例 に 乗る:1例	おーきなオートバイ(φ)乗るんですよ 日本人達と一緒に車に乗って

C-JASの韓国母語話者の学習者の発話データにおいて、「を 乗る」という誤用は1例しかなく、これだけでは習得が難しいとはいえないが、「バス (φ) 乗る」、「車 (φ) 乗る」のような格の脱落の現象が66.7%と多く、どの格を用いたらよいかわからないため、意図的に回避したとも考えられる。回避の現象については、5.3節で考察する。

■図1 C-JASにおける韓国語母語話者の「乗る」の格の使用の内訳



5.2.2「会う」の格の使用状況

次に、「会う」の格の習得について述べる。C-JASでは、「会う」の発話は100件あったが、そのうち、目的語が発話されているものに限って分析を行う。表8の黄色のセルは、「に会う」の発話が見られた時期であることを示している。黄色のセルの<>内は、「に会う」の形の正用の数を示している。また、表8の赤のセルは、誤用が見られた時期であることを示している。誤用の数は、()内に示した。セルに色が付いておらず、数が示されているセルは、誤用も見られないが、「に会う」という形の正用も見られないことを示す。

■表8 C-JASにおける韓国語母語話者の「会う」の発話とその回数

時期 話者	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期
K1	0	0	2	2 <1>	5 <1>	0	0	0
K2	2 (2)	2	0	0	0	0	2 <2>	0
K3	1	2	6 (2)	1	5	1 <1>	0	0

「に会う」という正用は、K1は4期・5期、K2は7期、K3は6期となっており、習得が遅いということがわかる。また、「を会う」という誤用は、K2の1期、K3の3期に見られた。「会う」の場合は、与格のほかに、「と会う」という共格（随伴格）も取る。韓国語母語話者の「会う」の格の使用の内訳は次の通りである。

■表9 C-JASにおける韓国語母語話者の「会う」の格の使用の内訳¹⁶

話者	時期	発話数	内訳	発話例
K1	3期	2例	φ会う:1例 と会う:1例	おじさん(φ)会うことは、あー、いいだ と思います。 【人名I】さんと一緒にー、会うことがー、 あって、
	4期	2例	に会う:1例 は会う:1例	あの先生に会いたくない あの人は、今、よく会わないから
	5期	5例	に会う:1例 と会う:3例 は会う:1例	【人名E】さんに会って、そんな話をしたで すね 卒業した学生達と会って、遊びによく行っ たですね 【人名P】さんは、まだ会ってないですね
K2	1期	2例	を会う:2例	この先生を、うん、会ってから
	2期	2例	φ会う:1例 と会う:1例	いい人(φ)たくさん会ったから 【人名M】さんの友達と会ったんですよ
	7期	2例	に会う:2例	サークルの先輩に会って
K3	1期	1例	φ会う:1例	友達みん、同じみっ、あいてー
	2期	2例	φ会う:2例	友達(φ)会う時
	3期	6例	と会う:3例 を会う:1例 の会う:1例 φ会う:1例	【人名B】さんと会った頃からかな 【人名B】さんを、あー、【人名B】さんと会 いました 【語学学校名I】に、【人名H】さんと【人名G】 くんの[ところへ]、会いに行きます 【人名C】さんと【人名B】さん(φ)だけ会 いました
	4期	1例	と会う:1例	におんじ[日本人]とあったい[会ったり] するから
	5期	5例	φ会う:3例 と会う:2例	手紙を書いて、お母さん(φ)会いたいど か[とか] 日本人の友達と会って
	6期	1例	に会う:1例	人に会えたらみんなね

▶16 表の[]内は学習者の発話を
わかりやすいように正しい形に
筆者が直したものである。

さらに、全体の29%が「友達(φ)会う」のように格を脱落させていた。これは、誤用ではないが、回避の可能性がある。次節では、格の脱落の現象について考察する。

5.3 格の脱落の現象についての考察

5.1節で見た「タグ付きKYコーパス」における韓国人日本語学習者は、中級・上級であっても「を会う」、「を乗る」という誤用をしているということがわかった。しかし、5.1節、5.2節で見たように、誤用の数自体は少なかったため、韓国人日本語学習者の学習困難度が高いという明確な証拠となっているとは言えない。しかし、誤用としては出てこなかったが、「バス(φ)乗る」、「友達(φ)会う」のような格の脱落の現象が多く見られるということが明らかになった。これは、学習者がどの格を用いたらよいのかわからない(あるいは自信がない)ため、誤用を回避した現象である可能性がある。

回避という現象は、Schachter (1974) によって明らかにされた現象である。

Schachterは、目標言語の構造が母語と極端に異なっている場合に、その言語システムを回避する傾向があると述べている。そのため、誤用分析では、回避の現象を説明できないという主張をしている。そこで、「バス(φ)乗る」、「友達(φ)会う」のような格の脱落の現象は、学習者のストラテジーとしての回避なのかどうかを明らかにするため、C-JASを用いて同じ学習者が、韓国語でも日本語でも対格で目的語を標示する動詞について対格を用いているかどうか調査した。目的語が発話されているものを対象とし、同じ学習者が「読む」の場合に「を」を省略しているかどうかを調査した。その結果を表10に示す。

- ▶17 K1の「会う」については、「あの人はよく会わないから・・・」、「【人名P】さんは、まだ会っていないですね」という発話があったが、誤用タグはついていなかった。前後の文脈を見て判断すると、これらは、「あの人はよく会わない」、「Pさんにはまだ会っていない」の方が自然な日本語であると思われるが、ここでは誤用に含めていない。これらを「に」の脱落と考えることもできる。

■表10 C-JASにおける学習者別の目的語の格の使用状況¹⁷

	K1	K2	K3
φ乗る	100% (4例)	40% (2例)	66.6% (2例)
誤用	0%	40% (2例)	0%
φ会う	11.1% (1例)	16.6% (1例)	43.8% (7例)
誤用	0%※	33.5% (2例)	12.5% (2例)
φ読む	0%	88.9% (8例)	40% (4例)
を読む	100% (4例)	11.1% (1例)	60% (6例)
誤用	0%	0%	0%

K1、K3の学習者は、「読む」について、「本を読む」のように「を読む」と発話している頻度が高く、「φ乗る」、「φ会う」は回避の可能性があると見える。K2の学習者については、「φ読む」と発話する頻度が高いことがわかった。しかし、K2の学習者は誤用も多い。回避かどうかはこれだけでは明確ではないが、他の動詞も調べてみることによって、その傾向は確かめられると考える。しかし、日本語母語話者でも格の脱落の現象が観察される。特に会話では格が省略されることも多い。韓国語人学習者に見られる格の脱落が回避であるかどうかを確かめるために、日本語母語話者の発話と比較する必要がある。そこで、日本語話し言葉コーパスである「BTSJコーパス」を用いて分析を行った。親しい同性友人同士（男女）の雑談、初対面と友人同士の女性の雑談、初対面の雑談（性差、年齢差あり）の3つの群、60会話（約1221分）を対象とした。その結果を表11,12に示す。

■表11 BTSJコーパスにおける日本語母語話者の会話における「乗る」の格の使用

	に	φ	とか	で	を
同性友人（男女）	6例	6例	2例	0例	1例
初対面女性・友人女性	4例	4例	1例	1例	0例
初対面（性差、年齢差あり）	9例	3例	1例	0例	1例
合計	19例 (48.7%)	13例 (33.3%)	4例 (10.3%)	1例 (2.6%)	2例 (5.1%)

■表12 BTSJコーパスにおける日本語母語話者の会話における「会う」の格の使用

	に	と	φ	とか	を	とも
同性友人（男女）	1例	1例	0例	0例	0例	0例
初対面女性・友人女性	3例	5例	2例	1例	1例	0例
初対面（性差、年齢差あり）	0例	0例	0例	0例	0例	1例
合計	4例 (26.7%)	6例 (40%)	2例 (13.3%)	1例 (6.7%)	1例 (6.7%)	1例 (6.7%)

韓国人学習者の「φ乗る」が66.7%、「φ会う」が29%に対し、日本語母語話者の「φ乗る」は33.3%、「φ会う」は13.3%であり、日本語母語話者の格の脱落は、韓国人学習者の半分以下の割合である。このように韓国人学習者は、日本語母語話者と比べて格を脱落させる現象が多く見られるため、日本語母語話者の格の脱落とは性質が異なると考えられる。

6 まとめ

本稿では、村山（2015）の主張を基に、MDHの有標性の定義を頻度に置き換えることで、格の学習困難度にも応用できることを示した。MDHを用いた格の学習困難度の予測にあたって、予備的なデータではあるが、韓国人日本語学習者コーパスを用いて調査を行った。その結果、韓国人日本語学習者については、中級・上級でも誤用が見られること、誤用として現れなかったものについても回避の可能性があることを示した。この結果は、日本語の与格目的語は、韓国語よりも、より有標であるため、習得が難しいというMDHに基づく予測が支持されることを示唆している。

今後の課題は、大きく分けて3つある。1つ目は、データの問題である。今回は、学習者コーパスを用いて調査を行ったが、本研究が対象としている格を取る動詞が少なかったという問題があった。今後は、学習者コーパスのデータの不足を補うテストを行い、格の学習困難度に関して有標性の観点からの説明を試みる。

2つ目は、有標性の違いに基づいて学習困難度が予測されるというMDHの主張を支持するより強い証拠を提示する必要がある。今回は韓国人日本語学習者のデータに着目して、分析を行ったが、日本人韓国語学習者を対象にした場合、有標から無標の構造を習得することになるので、韓国人日本語学習者の場合と反対に習得が易しいということを予測する。この予測が正しいかどうか検証することが必要である。

3つ目は、有標性以外の観点から格の学習困難度を説明する必要性があるかどうかを検討することである。特にMDHは、目的語を取る動詞の意味的な特徴について考慮に入れていないという点を再考する必要がある。今後は、MDHの検証を進めるのと平行し、他動性という動詞の意味的な特徴に基づく仮説についても検討する必要があると考えている。

謝辞

本稿は、2015年3月10日に行われた北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院国際シンポジウム「ボーダーレス時代の互惠の第二言語教育—多元的言語学習環境の創造」における口頭発表を発展させたものです。貴重なコメント・質問を下された参加者の皆様に感謝致します。本稿執筆にあたり、上田雅信先生には、終始懇切丁寧なご指導を賜りました。草稿の段階から貴重なアドバイスや温かい励ましをいただき、心より感謝致します。李鳳先生には、世宗韓日パラレルコーパスの使い方についてご指導いただきました。また、査読を担当してくださった匿名の2名の先生方から大変有益なコメントをいただきました。ここに記して感謝致します。本稿における瑕疵は全て著者の責任です。

参考文献

- Callies, M. (2013) "Markedness." In P. Robinson (ed.), *Routledge Encyclopedia of Second Language Acquisition*. New York: Routledge. 406-409.
- Croft, W. (2003) *Typology and Universals*. 2nd edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Eckman, F. (1977) "Markedness and the Contrastive Analysis Hypothesis." *Language Learning*, 27, 315-330.
- Eckman, F. (1991) "The Structural Conformity Hypothesis and the Acquisition of Consonant Clusters in the Interlanguage of ESL Learners." *Studies in Second Language Acquisition*, 13, 23-41.
- Eckman, F. (2011) "Linguistic Typology and Second Language Acquisition." In Jae Jung Song (ed.), *The Oxford Handbook of Linguistic Typology*, New York: Oxford University Press, 618-633.
- Ellis, R. (2008) *The Study of Second Language Acquisition*, 2nd edition. Oxford: Oxford University Press.
- Haspelmath, M. (2006) "Against Markedness (and What to Replace it With)." *Journal of Linguistics*, 42, 25-70.
- 加藤幸子・橋本知子・村杉恵子 (2004) 「格助詞「に」と後置詞「に」」『日本言語学会 第128回大会予稿集』, 日本言語学会, 43-48.
- Lado, R. (1957) *Linguistics Across Cultures: Applied Linguistics for Language Teachers*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Miyagawa, S. (1989) *Syntax and Semantics 22: Structure and Case Marking in Japanese*. New York: Academic Press.
- Moulton, W. (1962) *The Sounds of English and German*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 村山友里枝 (2015) 「第二言語習得における学習困難度の言語類型論的研究について—有標性の概念の問題点と格の学習困難度への拡張—」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』20号, 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院, 55-71.
- 永原歩 (2004) 「日本語の二格に対応するコリア語の格助詞について—学習者が間違いやすい用法のずれを中心に—」『東海大学外国語教育センター所報』第24輯, 東海大学外国語教育センター, 53-60.
- 奥田靖雄 (1983) 「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語研究会 (編) 『日本語文法・連語論 (資料編)』東京: むぎ書房, 281-323.
- Radford, A. (2004) *English Syntax: An Introduction*. Cambridge University Press. [外池滋生監訳 (2006) 『[新版] 入門 ミニマリスト統語論』東京: 研究社.]
- Sadakane, K. and M. Koizumi (1995) "On the Nature of the 'Dative' Particle ni in Japanese." *Linguistics*, 33, 5-33.
- 榮谷温子 (1997) 「第二言語獲得・習得に関わる有標性理論—その歴史と問題点—」『地域

文化研究』1号, 東京外国語大学大学院地域文化研究会, 45-64.

Schachter, J. (1974) "An Error in Error Analysis." *Language Learning* 24: 2, 205-214.

Selinker, L. (1972) "Interlanguage." *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 10, 209-231.

首藤佐智子・崔在雄・原田康也 (2012) 「「名詞句接続の日韓対照研究—「NP₁のNP₂」と「NP₁의NP₂」の制約の相違と相対的頻度—」『2012年度日本認知科学会第29回大会 発表論文集』, 日本認知科学会, 440-446.

Sohn, H. (1999) *The Korean Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

宇佐美まゆみ監修 (2011) 「BTSJによる日本語話し言葉コーパス (2011年版)」『人間の相互作用研究のための多言語会話コーパスの構築とその語用論的分析方法の開発』平成20-22年度科学研究費補助金基盤研究B (課題番号 20320072) 研究成果.

用例出典

李姫子・李鍾禧 (2010) 『韓国語文法 語尾・助詞辞典』東京: スリーエーネットワーク.

(平成27年9月15日受理、平成27年10月29日採択)